



第 1 部

静岡県立大学創立30周年を
どう捉えるか

◇◇◇ 歴代学長からのメッセージ ◇◇◇

歴代学長

初代	内藪 耕二 (故)	昭和62年4月～平成5年3月
2代	星 猛	平成5年4月～平成11年3月
3代	廣部 雅昭	平成11年4月～平成17年3月
4代	西垣 克	平成17年4月～平成21年3月
5代	木苗 直秀	平成21年3月～平成27年3月
6代	鬼頭 宏	平成27年4月～



(初代学長) 内藪 耕二 (故)

昭和62年4月～平成5年3月

在任中の沿革

昭和62年4月:開学

昭和63年4月:大学院薬学研究科(博士前期・後期課程)設置

平成元年3月:校舎が完成

平成3年4月:大学院生活健康科学研究科(修士課程)

および国際関係学研究科(修士課程)の設置



(第2代学長) 星 猛

平成5年4月～平成11年3月

在任中の沿革

平成7年4月:大学院生活健康科学研究科(博士後期課程)の設置

平成9年4月:看護学部および短期大学部歯科衛生学科・社会福祉学科の設置、

環境科学研究所(大学附置)の設置

平成10年4月:大学院経営情報学研究科(修士課程)の設置



“グローバル”にオンリー1とナンバー1を

(第3代学長)

廣部 雅昭

大学の長い歴史の中で創立30周年は、ほんの“序の口”とも言えますが、世の中の激しい変化に対応し、方向を誤らぬよう常に点検・評価を行いつつ、軌道修正を図って行くことは極めて重要なことです。1987年県立3大学を統合し「個性ある大学」を建学の精神に掲げてスタートした本学にあって、私は3代目学長として1999年より6年間重責を担わせて頂きましたが、当時は長引く経済不況の中で、全国的に大学の在り方に批判が集中しており、国は21世紀の新しい大学像として「競争的環境の中で個性の輝く大学」を掲げ、各大学に抜本的な改革を求めておりました。

社会の要請は、大学に蓄積された様々な知的資源の社会還元であり、そのために不断の自己点検・評価・情報開示を担保として、大学運営に大幅な自由度と規制緩和を認めるというものでした。その趣旨で全ての国立大学は2004年に法人化され、追従する形で各公立大学も法人化の道を歩み、2006年本学も静岡県公立大学法人に移行し今日に至りました。

紙数の関係で、在任中に実施した様々な改革や成果等について、また法人化への期待と課題などは「創立20周年記念誌」での既述に譲り、その後の10年、私は法人評価委員として本学の発展の姿を見続けて来た中で若干の感想を述べたいと思います。

大学の法人化により、競争的外部資金の潤沢化、設備等インフラの整備充実、順調な産学連携事業…一方では運営交付金の年次の削減、基礎研究・教育の軽視…等々もたらされた大学間格差拡大への喘ぎ声が大きくなって来たことも事実です。

ノーベル賞受賞者は異口同音「基礎研究にもっと光を…」「このままでは将来日本から受賞者は出ない

のでは…」と述べられる。従来から基礎研究と応用研究は相容れないかの如き風潮がありますが、これは誤りであり、私はいつも“ハンマー投げ”を例として上げています。つまり強い遠心力(応用力)で記録を競いますが、その力は丈夫なワイヤーで釣り合っている逆方向の強い求心力(基礎力)によって生み出されるのであり、両者は不即不離の関係にあるのです。画期的成果(応用)に結びついた時、その基礎となった研究は必ず脚光を浴びますが、その求心力は遠くに飛ばず技術力とともに人間の不断の努力により培われるもので、この二つの力をバランス良く繋ぐワイヤーこそが研究教育環境(資金等)に相当し、これが切断された場合は方向性を失い不測の事態を招くことにもなります。

地方公立大学の大きな使命は、ローカルな「目に見える地域貢献」であり、それを支える人的・知的資源はあくまでもグローバルな視点でハイレベルを目指すべきで、両者合わせた“グローバル”な姿勢が必要です。県立大学はこれまで異分野融合型の地域に根ざしたオンリー1の研究で全国的にトップクラスを維持し、国際的にも高い評価を得ておりますが、基礎研究と応用研究の関わりを分かりやすく発信する巧みな技術力も備わっている証であると感じています。

「新幹線」が創業50年余を経てなお「新幹線」と称されて違和感がないのは、常に新しい技術の導入など、ハード、ソフト両面で利用者へのサービスを怠らないからです。大学も常に「新大学」創立時の瑞々しい心意気を想起し、オンリー1、そしてナンバー1を目指して新たな発展を遂げられるよう心から期待する次第です。



静岡県立大学創立30周年にあたって

公立大学法人宮城大学 理事長・学長(第4代静岡県立大学学長)

西垣 克

2017年には県立大学として創立30周年の節目を迎えることになり、着実に地域に根ざした大学として、その存在価値を高めるため教職員一丸となって努力されていることに対して、深い敬意を払いたいと思います。廣部先生の後を継ぎ、創立20周年事業を担当した学長として、その後の目覚ましい発展に慶びを感じているところです。

この10年間でわが国は加速度的に少子高齢化社会へ移行し、今年はずいぶん出生数が100万人を割り込む事態となるなど、将来的に人口は減少し続けることが示されています。この少子化の時代においては、質の高い人材を教育し、国を守り、発展させていく基盤を構築することが急務であります。このような状況のもとで、地域社会に立地する大学の果たすべき役割は、より大きなものになってきていると言えるのです。

人類がその歴史において、知の集積と創造を担う社会組織として大学という機関を創設させてから、約一千年の年月が流れてきました。取り巻く環境は大きく変化し、社会における役割や機能に変化が生じたとしても、大学が有している普遍的な価値は不変のものであり、組織として持ち続けなければならないのだと思います。

北イタリアのポローニャに初めて大学が開校されてから、ヨーロッパには数多くの大学が設立されましたが、そのすべてが存続しているわけではありません。栄枯盛衰の流れの中で消滅した大学も数多くあり、それ以上に新しく設立された大学と共存しているのが現状でしょう。大学は一度設立されると消滅しない存在ではなく、油断すると消え去っていく組織

であることを深く自覚する必要があると考えています。想定外のことが生じるのが世の常であれば、いつの時代にもこの予知をこえた事象に対峙できる組織が大学であってほしいものです。

県立大学として、新たなる英知を創り出せる組織として、将来に向かって大いなる飛躍を遂げられることを目指して、次の10年に進んでいかれることを切望しています。



学生、教職員と歩んだ学長時代を想う

静岡県教育委員会教育長(第5代静岡県立大学長)、静岡県立大学名誉教授
木苗 直秀

開学30周年を迎えた静岡県立大学が薬学部、食品栄養科学部、国際関係学部、経営情報学部、看護学部とこれらの大学院を併設し、歯科衛生学科と社会福祉学科を有する短期大学部とともに本県の高等教育の拠点として着実に歩みを続けていることを大変嬉しく、また、頼もしく思っている。

私は平成21年3月に第5代学長を拝命し、6年余り務めた。当時を振り返ると、先ず学生と教職員が明るく、力強く歩みを進めるためのキャッチフレーズを考えることにした。その結果、「個^みを拓き、強い絆で知を発信」にたどりつき、英訳を含めて学内外から好評を頂いたと記憶している。

大学の本分として教育、研究は当然であるが、さらに文理融合して学内外の多くの行事に参加し、共同研究や学術フォーラムを通して社会との連携を計った。週1~2日は通学時に学内を巡回し、「おはよう」と声をかけると学生達が元気良く「おはようございます」と応えてくれたので気持ち良く一日を過ごすことが出来た。

学長室のドアはいつも開けてあり、学生や教職員と昼食を共にするランチミーティングを積極的に行い、コミュニケーションを楽しんだ。学生達の悩みや要望を聞き、教職員の相談にも応じた。その時、緑茶やみかんがコミュニケーションのツールとして活躍してくれた。

学長就任時は「はばたき棟」の周囲の木々が生い茂っていたので思い切った伐採をお願いしたところ、晴れた日には富士山を仰ぐことができる学長室に生まれ変わり、県外や海外からの訪問者との会話が弾んだことが思い出される。

学長在任中に食品栄養科学部に新たに環境生命科学科が誕生し、経営情報イノベーション研究科に博士課程が開設された。さらに4年生学部と短大部が統合した

新看護学部の開設にたどりつき、小鹿キャンパスに看護学部棟の完成を見届けることが出来た。平成19年度から6年にわたり文部科学省より採択されたグローバルCOE (Center of Excellence) 事業では主として薬学系と食品栄養科学系の教員が国内外の大学、研究機関との共同研究を積極的に進め、大学院生の海外研修派遣を推進することが出来た。

平成26年度には文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」に採択されたので静岡県、静岡市、牧之原市とともに地方創生を含め、健康長寿をめざした教育活動やフィールドワークが進行中であり、その成果を期待している。

学長任期の後半には全国86大学からなる公立大学協会の副会長および会長を2年ずつ務めさせて頂いた。平成24年度に本学で開催した学長会議では小生が提案して各大学より学生とともに参加をお願いし、学生達による防災や地域活性化に関するフォーラムの開催とともに学長との意見交換の場を設けた。この方式が現在も続けられていることを嬉しく思っている。

学長在任時は、入学式直後に「学長1時限目の授業」と称し、新入生、保護者、教員に向けて大学の紹介、教育の方針、自己紹介等を行った。また、学長杯争奪駅伝大会、はばたきカフェ、留学生との交流会、成人の日の集い、産学連携シンポジウム、静岡県健康長寿学術フォーラムなどを毎年開催し、多くの良き思い出となっており、それらの継続が重要である。

創立30周年は、通過点である。チーム静岡県立大学として、益々の発展を期待している。

(静岡県教育委員会教育長室にて)



静岡県立大学への期待

静岡産業大学総合研究所所長

静岡県立大学名誉教授(元静岡県公立大学法人教育研究審議会委員)

大坪 檀

静岡県に県立大学が創設され、新設の経営情報学部で経営学の教員が必要なので、県立大学の創立に参加しないかと熱心なお誘いを受けた。アメリカの大学院に留学し、一時帰国した際お誘いを受けて途中入社し、それまで28年間非常にお世話になり、めったに経験できない様々なプロジェクトに参加させて頂いた(株)ブリヂストンの幹部のご理解もあり、途中退社し思い切って新しい人生を歩むことにした。研究室からは毎日富士山が見えるからねという言葉もさることながら、新しい学部を創造しようとする初代の学部長、林周二先生のロマンに大いに動かされた。

初代の学長は内園先生。日本一の県立大学を作るのだとことあるごとにその意気込みを教職員に披歴されていたのを思い出す。日本一の県立大学の目指すところは何か。具体的な目標は別にして、新発足した県立大学には課題山積み。従来からの伝統、しがらみが新大学を生み出し、進歩発展させるうえで足かせになったが、日本一の県立大学を目指す努力はそれぞれの思いを胸にして色々とおこなわれた。

2代目学長は星先生。内園先生の掲げられた日本一の県立大学を実現するために“県立大学将来構想委員会”が設置され、小生はその構想作成の世話役を委嘱された。各学部から問題意識の旺盛な教員が参加、県立大学の目指す姿、解決すべき課題について討議が行われ、構想案は星先生の後任学長の広部先生に提出された。その構想案作成の中で県立大学の役割についていろいろな角度から意見の交換が行われたが、大学の役割は教育第一、

最先端の教育を行うために大学は最先端の研究を行うのであるという趣旨の結論に比較的すんなりと全員の意見がまとまったのを思い出す。

その後筆者は11年間の勤務を得て定年退職し、静岡産業大学に移り大学改革に従事することになり、当時の県立大学の将来構想での議論、提案を大いに参考にさせて頂いた。一番重要視し改革の核に置いたのが教育第一主義。とかく研究に目を向けがちな教員に教育に関心を持ち学生を育てることの重要性を認識してもらうことを大学運営の基本方針に打ち出し”大化け教育“を標榜することになった。もうひとつ重視したのが、大学は静岡県、静岡県民の発展のために尽くすという趣旨で、これは理念、ミッションの形で、またのちに県民大学宣言として表明した。

大学に求められる役割は近年大幅に変革、改革を求められているが、とりわけ県民の税金、また国税が大量投入されている県立大学の場合、ここにきてその役割を改めて基本から問いただす必要がある。県立大学しかできない任務、果たすべき役割、行動、制度、仕組は何か。県立大学ができて30年。木苗学長時代には学外委員として教育研究審議会に毎月参加する機会に恵まれ、日本一を目指すべき県立大学の活動に色々発言させて頂いた。ここにきて創立当初の内園先生の日本一を目指す志を再び想起し、地域創生、地域社会に貢献し、革新するユニークな大学、新時代のモデルたるべく新たな発展の道を歩まれることを切望したい。



地方創成のベンチマークを目標に

静岡県公立大学法人教育研究審議会委員
沼津工業高等専門学校名誉教授(前学校長)

柳下 福蔵

静岡県立大学が記念すべき創立30周年を迎えましたことに心よりお慶び申し上げますとともに、同学の設立、充実、発展に携わってこられました諸兄各位に衷心より敬意を表したいと思います。

小職は県東部の沼津工業高等専門学校(以後、沼津高専)で40数年の教員生活を送り、最後の7年間は学校長として学校の管理運営を務めた体験をもとに、沼津高専と静岡県東部地域の連携の具体例を紹介させていただきます。30代から沼津市産学官連携推進事業の一員として、平成2年6月に設立間もない県立沼津工業技術センター(現・沼津工業技術支援センター)で(社)精密工学会静岡県東部地区精密技術研究会の設立総会を開催、平成16年に地域共同テクノセンターが設置されて以後は富士川以東の企業を対象とする支援が充実、県立静岡がんセンターが中核機関の産学官金連携事業・ファルマヴァレー・プロジェクトには平成14年の事業開始当初から協力させていただいております。平成19年11月、沼津の地で開催された第39回技能五輪国際大会の際には沼津高専のグラウンド一面に特設の第二競技場が設置され、教職員全員・学生全員のオール高専体制で協力させていただいたことが懐かしく思い出されます。

平成20年に学校長拝命後は、県内の高等教育機関で組織された「大学間ネットワーク委員会」の末席で当時静岡県立大学学長の木苗直秀先生とたびたびお逢いする機会に恵まれ、静岡県立大学の存在が身近なものになりました。平成26年、開設間もない沼津プラサ・ヴェルデで開催された第19回静岡・健康長寿学術フォーラムに参加させていただ

き、地域性豊かな県民参加の学術フォーラムを企画し、継続して運営してこられた静岡県立大学ならびに静岡県の関係各位に敬意を表した次第です。

創立30周年を機に、少子高齢化、グローバル化が益々進展するこれからの社会における大学のあり方を考える時、大阪大学名誉教授・猪木武徳先生の創立30周年記念講演「産業化社会と大学の未来一個の自立と地方分権の視点から」は極めて示唆に富んだ羅針盤を提示されました。創造力と判断力を育む静岡県立大学が教育・研究・社会貢献を柱として、地方創成を標榜する我が国に良きベンチマークを示されることを祈念します。

結びに、創立30周年記念「はなむけの歌」を贈呈させていただきます。

霊峰を あがめて学舎 とこしえに
学びの心 日々新たなり



〈県立大からの霊峰富士の眺望〉



県大の未来に向けて共に(現役学生諸君へ)

学校法人新静岡学園監査室長
静岡県立大学国際関係学部・研究科同窓会長(1期生)
静岡県立大学創立30周年記念事業実行委員会委員

吉添 克宏

まずは静岡県立大学開学30周年おめでとうございます。国際関係学部の同窓会役員ということで記念事業の実行委員会に関わらせていただいていたご縁で、このたび記念誌への寄稿という光栄に浴することとなりましたので、この大役を頂いたのを機に、自分の記憶の中の県大と「母校」となった県大の今を比較しながら、大学の未来へと想いを馳せてみることにいたしました。

この「30年」という月日ですが、まさにあつという間の30年だったなと感じています。もうすぐ50歳になるという自分ですが、県大で過ごした4年間の思い出は、ついこの間の事のように鮮やかに記憶に残っています。

まだ昭和の世であった30年前の4月20日。少し遅めの入学式で未だ工事中のキャンパスに新設大学の1期生として集まった同級生達。今思うと、歴史や伝統はおろか校舎も2棟だけでグラウンドも無い状態の大学に入ろう、などと考える私達は、やはり「変わり者」だったのか、とも思います。何も無いなら創り出せばいい、とばかりに部・サークルの創設、学園祭の命名、先輩のいない就職活動と、新たな県大の歴史の創造主となれる喜びを自覚し、満喫しながらキャンパス内を駆け抜けていきました。

もちろん、その過程では「静岡県立大? ああ静大でしょ?」とか「国際関係? 経営情報? 食品栄養? それ何やってる学部なの?」と無名大学の創設学部ならではの洗礼を浴びることもしばしば。しかし初期の「新県大生」は新しい環境に飛び込もうという思考回路の持ち主だけあって、世間に県大を認めさせたい、というような気概を持っていたと思います。

一方、現在私は学部同窓会の関係やサッカー部のOB会で現役学生と接触することも多く、色々とお話しさせていただく機会がありますが、残念ながらあの頃の「新県大生」に比べ真面目で大人しい印象を感じることが多くあります。県大30周年を10年周期で考えると「誕生期」「定着期」「安定期」の30年と考えることができるとは思います。失礼ながら今の学生達は安定期であるが故に「県大に入学できたんだ、よかったね。」と県大の「名前」に甘えている部分もあるのでは、と感じてしまいます。「誕生～定着～安定」の次の10年を「発展」や「躍進」のキーワードで飾るためには、原点回帰、何もないところから始まった大学の強みを学生自身が認識し、「入学ゴール」に陥ることなく何かを産み出すためにチャレンジする学生になって欲しいと思います。

幸いなことに、大学全体としては、健康長寿への取り組みや県内唯一のCOC採択など、大学の理念通り、たゆみなく発展していく体制づくりに大変力を注いでいます。あとは主役たる学生の皆さんが既存の価値に寄りかかることなく、「新県大生」が強く持っていた未知なるものに挑戦する気概を大いに発揮する「先祖返り」を見せつけてくれることにより、ますます県大の価値を高めていくことができるのでは、と感じています。

母校の発展は卒業生の誇りであり、卒業生の活躍は現役の励みになると信じています。これからの県大の未来を支えていけるようお互いに努力していきましょう。



開学の思い出:紆余曲折の険しい道のり

静岡県立大学名誉教授

高瀬 幸子

「この拓けし丘にはげしきもの興るというにはあらね花滴々と」を刻んだ石碑が、旧静岡女子大学の日本庭園から今の県大キャンパスのはばたき棟玄関前に移されています。この詩は当時国文科の高原博教授が女子大学開学に寄せて詠まれたものと聞いています。奇しくも、静岡県立大学の誕生を予感させる。事は昭和56年春に行われた学長選挙に端を発し、学内は騒然となり、この事態が静岡女子大学の終焉に至る動きとなりました。昭和57年当時の山本知事は静岡県立大学問題協議会を設立して県立3大学のあり方を諮問しました。その年に、「時代の変遷や社会の変革に伴う社会の要請に答えて」を理由に県立の3大学統廃合（静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡県立短期大学）、そして静岡女子大学の閉学が決まりました。

3大学の統廃合において一番大きな変革を迫られたのは静岡女子大学であり、その変革の計画推進は学内からではなく、行政サイドからの一方的な推進でした。昭和59年から開学まで、「総務部学事文書課県立大学建設室兼務を命ずる」の知事辞令を受けて、教務スタッフとして新大学の設立準備に全力を投じました。江崎幸子教授（学部長予定者）と共に、神谷真太郎教授の協力を得た実質3人で新学部構想を立ちあげ、人事を除く多くの仕事に携わりました。昭和57年に米国Vanderbilt大学医学部生化学科に2度目の留学をした時の見聞・経験を活かして設立準備に携わりました。同大学が改築新設されたばかりの施設やそれら管理システム等を、新大学の研究施設の計画に参考にしました。新しい学部構想（食品栄養科学部）の施設設計や研究

機器購入計画にあたり、次の3点の設置を特に主張しました。1) 蒸留水の集中管理と供給: 科学実験に不可欠な蒸留水の供給が集中管理され、実験室の流し場の蛇口から蒸留水が出るVanderbilt大学の実態に驚嘆しました。当時の日本にはなく、それを開学する新大学への導入を願いました。2) 実験動物室のケアには委託管理システムを導入。3) 特殊機能を持つ実験設備の導入: 低温実験室、細胞培養室や紫外線除去可能な実験設備（暗室）を設置して、開学後の研究内容の充実と進展を見越した設備の充実を図りました。

当時も今も、静岡県は全国的に見て食品産業が多く、それらの活性化に寄与できる新大学開設（農学部的内容）を県は希望しました。そこで食品学科と栄養学科から成る新しい学部構想を立ち上げて申請しましたが、当時の文科省は、国内にある既存の学部名称にこだわり、容易に認可しませんでした。文部省も厚生省も取り扱った前例のない新しい学部構想（食品栄養科学部）を実現させた過程は、忘れられない紆余曲折の険しい道のりでした。

昭和60年に、国立岡崎生理学研究所所長（東大医教授の停年退職後）だった内蘭耕二先生が、女子大学の最終学長として赴任され、新大学建設準備に携われました。特に文科省に出向いて新学部名を説明して理解を求めて、文科省認可のため努力されました。昭和61年春から星猛先生が学部長予定者となり（江崎教授と交替）、そのリーダーシップにより学部構想や施設設備計画の見直しと修正を加えて前例のない学部が完成しました。



● 総合司会

小針 進氏

学生部長 国際関係学部教授

● コーディネーター

津富 宏氏

創立30周年記念実行委員会副委員長
学生部副部長 国際関係学部教授

○**小針氏** 開学記念行事の第3部、シンポジウム「30年後の静岡へのメッセージ」を開催したいと思います。

早速、ディスカッションのほうに入りたいと思いますが、本日、登壇されているのはコーディネーターとして、学生部副部長の津富宏先生です。それから、学生代表として3人来ていただきました。文系と理系の学生、それから、大学院生で留学生という構成です。

まず、食品栄養科学部の佐山さん、経営情報学部の土肥君、留学生として宋君です。

○**津富氏** 皆さん、こんにちは。30周年記念事業はこれから続いて行きますが、このシンポジウムは、30周年イベントのキックオフの位置付けです。学生さんからアドバイス等の提案もらおうというのは、すごく楽

● パネリスト

佐山 音緒氏

食品栄養科学部(栄養化学研究室) 4年

宋 復燃氏

薬食生命科学総合学府、博士後期課程 1年

土肥 潤也氏

経営情報学部 4年

しみだなと思っております。

3人から、大体10分ずつ、アドバイスとか提案ただいて、それに対して学長に、大学に対してお返事いただくと考えております。今日は大学の総責任者の学長にいろんな提案ができるということです。よろしくお願ひします。

○**佐山氏** 「発信する力」というタイトルで、話を聞いていただきたいと思います。

今、食品栄養科学部にいて、すごくいいなと思っている点が2つあります。1つ目は、少人数でアットホームな雰囲気です。先生方も非常に面倒見がよくて、快適に楽しく生活させていただいています。もう1つは、食品栄養に関する非常に専門的な知識を先生方から学べる点です。ただ、この2つ、反面ちょっと悪いなって思う点もあります。その少人数でアットホームと



いう分、非常に排他的で、他学部との交流が少ないように感じています。何か話をするのも、常に食品栄養科学部の友達で、何人かは文系にも友達いますが、繋がりが非常に薄いと思っています。もう1つは、この専門的な講義に関しては、座学が中心なので、学生がどうしても受け身で、自分で考えて何かをするという機会が少なかったと思います。その結果、自分の意見を上手に伝えるとか、質疑応答の場で、「はい、手を挙げて」って先生が言っても、みんな、私はいいですという感じになってしまう。その他にも、自分から何かを考えて、こういうことをしましょうというアイデアを出していく人が、やはり少ないと思います。自ら発信することを避けてしまう学生さんが、多いと感じています。

そこで、私が提案したいのは、講義・発表会・意見交流。この3つを、発信力を身につけるものにしていきたいと思っています。

1つ目の提案です。企画・プレゼンに特化した講義。1年の時、全学共通科目で、経営情報学部等の先生の話の聞かせていただきましたが、2年生以降になるとほとんどが専門的な授業で、プレゼンを学ぶ講義というものはないのでは?と思います。企画・プレゼンの講義を通じて、考え方を120%伝えるためのスキルを磨ける、そういう場にしたと思っています。

2つ目の提案です。自分の学問分野について、広く発表できる場があればと思います。私の所属は食品栄養科学部なので、食品の例であげさせていただきます。時間栄養学という、食べるタイミングでその体の働きが変わるといふか、食べたものが同じものでも違った効果が出てくるという学問があります。このように一般の人にも知ってもらいたい、一般の人にも名前が聞いたことはあるけど、内容がよくわからないというものを、学生がきちんと解説できるような場があると、面

白いのではと思っています。

最後に、他学部との意見交流の場。こちらは、「学部の壁を越えて気軽に話ができる場づくり」と書いたのですが、どうしても国際関係学部や経営情報学部の方とは話をする機会がなくて、もっと気軽に話ができる場があるといいなと思っています。

もう1つ、「テーマに沿って学生たちの意見を交換」と書いたのですが、何らかのテーマ、本題をあげて、それに対して色々な学部の目線から解決策を見つけられたらおもしろいのではないかなと思いました。お互いに知識を共有して更に、学部単体では、なかなかできない相互作用、あ、そんな考え方があるんだ、じゃあ私たち、こういうスキルがあるから、こういうことをしてみよう、ということが起こることを期待しています。

発信から得られることとして、人に伝えるためにはまず、自分が1番理解していなければいけないので、そういうテーマに対する深い理解が得られるのではないかなと思います。

次の、「自身への評価」では、行動を、どこかで誰かが見ていてくれて、それはちょっと違うよと意見を言ってくれることで、自分ももっといい方向に伸びていくかもしれないということです。

最後に「他者の視点」。他の学生さんの目線や、先生方もそうですが、こういう方法があったよと言ってくれる人の目線があることで、もっと先にステップアップしていけるのではないかなと思います。

まとめです。「発信力を身につける」ということですが、一応今回のテーマが、「30年後の大学」ということで、授業をすごく真面目に受けて、決められたカリキュラムをこなして、その技術だったりとか、知識を身につけていくことも、もちろん大事なんですけども、社会に出た後に求められる人というのは、自分から考えを発信していく人なのではないかなと思います。私自身も常に、何か新しいことをしようと言っている人は、すごく魅力的だと感じます。30年後の私たちは発信できる人として、成長できているといいなと思います。

○宋氏 中国の出身で、在日は4年目、この学校で3年目に入ります。

私のテーマは、「県大に対して留学生の期待」とい



うことで、一つは、留学生の立場から、もう一つは中国で大学教育を受けた者の立場から、お話をしたいと思います。

まず、おもしろいグラフを見せたいと思います。これは、日本の年間の出生数のグラフです。2回のベビーブームの後、出生数は200万人に至り、30年後の平成23年まで、およそ半分になりました。少子化の影響で、小・中・高校で廃校という問題が生じました、この問題が何時、県立大学にくるのか、それで県立大学は、どうやって生き残るかということを、今日の課題として話したいと思います。ただの生き残るということだけではなく、今まで3年間の経験から、効率的な大学をつくらう、学校の未来を育成しよう、学校の声をきちんと学内から社会や海外まで伝えようという3つのテーマで、理想的な大学の様子を話そうと思います。

まずは、効率的な大学を作ろうということです。今までの県大生活から見ると、教員の方々がたくさんの事務の仕事をやってくれたと感じています。大学の教員といえども研究者や教育者の存在はずと思いますけれど、専門外の事務の仕事で研究の時間が減少し、精力も分散してしまいました。学校の運営費用は下がりますけど、研究や教育の効率も下がり、逆に学校と学生の損になるのではないのでしょうかと考えています。

本日のような学長や様々な学校の管理者と学校の将来を話す機会が少ないですけど、もっと現実的にお金の話をしたいと思います。大学教育の代表といえばアメリカと考えられます。アメリカの名学校では、学生から学校へのアイデンティティが高い。その高いアイデンティティは、どのようなことを引き起こしていますか。学生が卒業し、素晴らしい人になった後、寄附金が集まります。例として、中国でとても有名な中国人民大学を卒業し、アメリカのイエール大学に進学して、

卒業した方がいます。その方は、卒業した後、自分の会社をつくって、結局8億8888万8888円、それをイエール大学に寄附しました。なぜ中国の大学に寄附しないのか。なぜ中国で二十数年生活したにも関わらず、イエール大学に膨大な寄附をしたのか。学生を中心に育て方が重要だと思います。提案としては、中国とアメリカのようにStudent Unionを成立しよう。クラブだけではなく、学校行事や入学式、卒業式までも学生が中心となって計画・運営をしてもらうという形です。それにより、学生の各々の才能を磨くことができると思います。事務局の負担が減り、教員の研究・教育時間の確保とストレスの軽減につながると思います。

続いて、学校の未来を育成しよう。素晴らしい学生が多ければ多いほど学校の未来は明るいと予想できると思います。問題点としては、教員の国際交流と共同研究が進んでいるが、学生の国際交流、特に理科系の留学地域が少ない。それには学生、学校と教諭の両方の努力が必要だと思います。また、県大生はよく就職先に使いやすい学生と言われ、学生の個人的な教育およびリーダーシップの育成が重要だと考えます。案として、学生の考えをよく聞き、将来の志望より個性的な教育を行いましょ。例えば研究に熱心な学生の場合、早めに研究室に入るチャンスを作ってあげ、ベンチャーを興したい学生がいれば、学校から融資のチャンスやフリーの事務所も提供してあげようと考えています。

次に話したいのは学校の声をきちんと学内から社会や海外へ伝えようということです。提案としては学校に対する学生のアイデンティティを向上するために全学校の学生と一緒に参加できる活動をよく行いましょう。また、先話したSUのような組織を成立させて、学生自体の知恵を活用して、自分の学校のよさを外へも伝えようと考えています。

最後に、1908年のある専門学校の写真。カリフォルニア工科大学です。創立は、1891年。それは、アメリカ経済の活発の時点、県立大学も1980年代の日本の経済の発達に創立されました。カリフォルニア工科大学は、2011年10月のイギリスの高等教育専門誌「TIMES HIGHER Education」において、ハーバード大学を抜き、世界一の高等教育機関として位置づけられました。学部生は896人、大学院生

は1,275人。国際学生が多く、中国系、韓国系などアジア系の学生が在校生の31%を占めています。

これは、30年後の県立大学、50年後の県立大学、100年後の県立大学だと思います。

○土肥氏 僕自身の声だけではなく、インターネットを使って、学生の声を集めてみました。2週間で大体50人くらいからの回答があり、ツイッター等を使って、コメントをいただく形で色々な意見をもらうことができました。大学外の方からコメントをいただいたり、大学のOB、OGの方からも、僕も多分全くつながりがないと思うんですけど、誰かがシェアしたりとか、リツイートとかをして、いろいろ声を集めていくことができました。若干、国際関係と経営情報が多いので、文系の声を反映できたかなというふうには思います。

今回3つ、提案をさせていただくのですが、本当に大学に対する要望とか、意見とかが非常に多いと感じました。なぜ今回、わざわざツイッター等で流れてきたものを、長い時間をかけて、わざわざ自分の時間を使ってまで、要望をいれてくるのは相当、溜まっているものがあるんじゃないのかなと思います。そのあたりも含めて、僕なりに考えて3つ提案をさせていただきます。

まず1つ目に、学生地域交流センターというのを提案します。サークル以外で他学部の学生と交流をするような機会が、非常に少ないと感じています。実際に、地域貢献とかに取り組んでいる学生もいるので、そういう学生たちを中心にしながら、学生と地域を繋いだり、学生同士が繋がるような交流の機会を作って行けたらいいのではないかと思います。ただ、場所があるだけだと、たまり場みたいな感じになってしまうので、専門員ではないですが、コーディネーターみたいな方がそこにいらっちゃって、こういうことがしたいんだけどというふうに言ったときに、「あそこに行けば」とか、「〇〇先生に聞けば」ということができるような場所であるといいなと思います。これは、僕自身の体験でもあります。大学4年間、主に焼津市とか静岡市とかで、地域活動に取り組んできましたが、静岡県立大学は地域貢献を掲げている大学だということで、入学したのですが、結局のところ自分で何かを立ち上げたりした際に、大学側からサポートしてもらったことは、今思えば、あまりなかったと思い、地域貢献を掲げ



てる大学内にそれが無いというのが、やっぱり問題だと思います。

もう1つは、宋さんのほうからStudent Unionの話がありましたが、ちょっと経営情動的な視点で、ウェブツールを活用した学生のユニオンもできるのではないかなと思っています。何かを学生達が、自分達で考え、大学側に発信をしたりとか、もしくは地域の場に発信をしたりというようなことができるような組織が必要だと思います。そうは言っても、必ずしも全ての学生がそこにコミットできるわけではないので、ウェブのツールを用いて、今回も50人分しか集められなかったのですが、経営情報系の先生方で多分、そういうことができる先生がいらっしゃるんじゃないかなというふうに想像するので、何かこうそういうことができればいいのではないかと思います。今、学生が消費者化しているというか、お客様になっていて、社会に出た後に、市民として、地域を担っていく人材になっているのかというのと、やはり疑問があると、そういう意味で大学の中で、市民を育てるということも、もう少し意識したことを、していかなければいけないのかなというふうに思います。

これは、1番多かった意見なのかなと思うのですが、例えば、どのクラブとか、サークルにどのくらい予算がついているのかということは、学生は把握できなくて、うちのクラブは部室がもらえないとか、そういう不満を言っている学生って非常に多くて、ただそれを、直接学生室とか大学に言って、どうにかしてもらえるかというのと、なかなかそういうふうにもいかないので、まずは情報を透明にしていきたいと思います。

他にも恐らく、色々な情報であったりとか、後は、事業評価だとか、教員方の評価だと思うんですけども、そういうことに関しても情報を公開したり、アクセスするような権利を、学生たちに与えていくのは大事な

第3章 開学記念行事シンポジウム「30年後の静岡へのメッセージ」

ことではないかと思えます。

地域に根差した大学というのは、静岡県立大学の強みだと思います。僕自身4年間、それを実感している部分もかなりあり、本当の意味で、地域と学生と教員と大学の4者でつくる県立大学を、30年後、できたらと思えます。

○鬼頭学長 まず、何が印象に残ったか、そして何をやっていかなければいけないのか、共通していることから話したいと思います。

私は半世紀にわたって私学で育ち、私学で働いてきましたが、私学との決定的な違いは何かというと、まさに、宋さんのおっしゃったアイデンティティなんですね。本学のホームページを見てください。大学の理念・目標、それぞれ5項目あります。学生のQOLを高めますとか、あるいは素晴らしい研究を行いますとか。だけどこの学校として、どういう学生を育てたいのか、あるいはどういう研究を推進したいのかという姿が見えてこない。それではアイデンティティがない。残念ながら公立学校であると、具体像示すのは、難しいのかなとも思いますが、我々は、もっと具体的な像を描かなければいけないことです。

それともう1つは、佐山さんが言われた、学生に受身の人が多いということです。就職率も高いし、業界の受けもいいです。業界の方は、非常にいい学生が来てくれることに感謝してくれます。しかし、それがただまじめで、従順でよく働いて。使う側としたらこんなありがたいことはないということだけだと、ちょっと残念でもあります。でも、本当に、リーダーとして静岡県を引っ張ってくれるだろうか。そのためには佐山さんが言われていた発表できる、企画できる、そういう教育が必要で、これは実は日本全体に求められていることです。アクティブラーニングです。本学は資格取得を売りにしているところがある。そうすると、どうしてもきちっと決められた枠の中で勉強して、それなりの成果をあげていくことを求められるけども、本当はもっと創造力の部分、そこをやっていかないと30年後は、もたないよってことですよね。

そして、最後の土肥君の意見ですけれども、ちょっと修正を加えたいのですが、4者の関係で学生・教員・大学・地域とありましたけれども、や

はりそこに、職員もぜひ加えていただきたい。職員加えて5者と言ってもいいのかもしれない。

そして、共通することとして、もっと交流を深めたらどうだろうか。その交流というのが地域の交流もあるし、教員と学生の交流もあるけれども、学生同士の交流も足りないよって話ですよ。

そのためには、同窓会つくりましょうということです。さっき、宋さんから話が出ましたけれども、私は、それをものすごく痛感しています。自分たちの出た学校を好きになって支えてもらいたいです。そして後輩のために、寄附をしてもらいたい。それによって、いろんな施設がよくなっていく、サークルも活動費を得ることができる。

もう1つは、皆さんが共通して言っていたことです。これは、実は私が今年の入学式で新入生に対して話したことです。同窓会の話とも繋がっています。自立とユニティって言葉なんです。何で今年、自立ということを強く言ったかと言うと、6月から18歳から20歳までの人が、選挙権を持てるようになります。だから、政治的に自分の頭で考えて、自分で行動することをぜひ、やってくださいということです。

それから、ユニティです。スチューデントユニオンです。繋がります。団結、あるいは一体化することです。それは、同窓会にもつながるし、学生同士の繋がりをもっと深めましょう、教員と学生の距離を縮めましょう、職員も一緒になりましょう、まさにそこなんです。それぞれ自立しながら、繋がっていきましょうよ、あるいは支えあっていきましょうよって話ですよ。

ぜひ、皆さんの自主的な活動を期待しております。

今日は、いろんな提言、ありがとうございました。

